

学科目「保育内容総論」の研究

——教育目的と教育内容の発展課題の考察——

吉田 真弓

1. 研究の目的と方法

(1) 目的

本研究の目的は、第一に、幼稚園教諭養成教育課程及び保育士養成教育課程において、ますます重要性を増してきている学科目のひとつである、「保育内容総論」の教育目的、教育内容及び具体的なシラバス水準で議論を深め、整理することにある。学科目「保育内容総論」は2020年実施が予定されている、今回の幼稚園教諭・保育士養成教育課程の改訂に伴う位置づけの変更（「教育課程及び指導法に関する科目群」から「領域及び保育内容の指導法に関する科目群」へ変更）と、それに伴う授業内容の整理を試みたものである。

第二には、保育内容総論という学科目の創設時、どのような教育的意図と、教科内容が予定されているかを明らかにすることを通じて、あらためて学科目保育内容総論の存在意義を確かめることである。

第三に、養成教育課程課程認定対象校で使用されている「教科書」の、内容体系の混乱と整理の必要性を提言することにある。例えば、保育内容総論の教科内容と、それに関連する学科目のテキストの内容はどの様に区別されて構成されているかは、大変興味深い課題である。教科目「保育内容総論」において、そのテキストの多くは保育内容の歴史的変遷を扱い、幼稚園教育要領・保育所保育指針・幼保連携型認定こども園教育・保育要領の概説、5領域の内容解説を行い、特別な支援を必要とする子どもの保育内容を扱っているものが多い。こうした内容を精査したとき、それは、本当にそれで良いのだろうか、という疑問が残る。

(2) 方法

- 1) 本研究の目的を達成するために、第一、第二の課題については、以下の資料を使用した。
 - ①保育教諭養成課程研究会（無藤隆代表）『幼稚園教諭養成課程をどう構成するか』萌文書林、2017
 - ②「幼稚園教諭養成課程と保育士養成課程を併設する際の担当者のシラバス作成について」保育教諭養成課程研究会 (<http://youseikatei.com/>)；日本保育者養成教育学会 (<http://www.h-hyousei-edu.jp/>)
 - ③門田理世・渡邊由恵・諫山由美子「指導計画作成における保育学生の保育内容5領域の捉えに関する一考察」、『西南学院大学人間科学論集』13-1、2017
 - ④川俣沙織・川俣美佐子・永渕美香子・園入智仁・増田隆・那須信樹「『保育内容総論』運営

上の課題に関する研究』、『中村学園大学研究紀要』第47号、2015

⑤徳本達夫「保育内容総論授業の現状と課題」、広島文教女子大学『人間福祉研究』第13号、2015

⑥中山忠政「保育士養成課程における教科目名称の変更」、『プール学院大学研究所紀要』第52号、2012

⑦源証香、小谷宜路「保育内容研究の在り方に関する一考察」、『白梅学園大学紀要』、2013

2) 第三の課題の遂行に関しては、以下の文献リスト（リスト1）を作成し、その中から日本を代表する研究者が関連しているものを抽出し、検討対象とした。

1. 保育内容総論テキスト一覧

本リストの内容は、基本的にアマゾンによって検索したリストである。しかし、これらは全国水準で入手可能で、その執筆者達は、保育者養成において、一定の影響力を持っていると考えられるものである。リスト1は、現在最新の物である。またリスト2は「保育内容総論」という学科学科対応のテキストが刊行され始めた時期の、歴史的文献リストである。執筆者はいずれも当時の保育界（1990～2014年で区分）において、主要な役割を果たしていた研究者達である。従って、その方々がどの様に保育内容総論を構想していたかについて整理することは、今日あらためて保育内容総論の教育目的と内容を検証する上で、貴重な示唆点を提供してくれると思われる。

リスト1. 最新文献

発行年	編著者	書名	発行所等
2016	開仁志	漫画とアクティブラーニングで学ぶ 保育内容総論	教育情報出版
2016	神田伸生・請川滋大他	保育内容総論—子どもの生活・環境・遊びに向き合う—	萌文書林
2016	入江礼子・榎沢良彦	保育内容総論（シートブック）	建帛社
2017	石川昭義・松川恵子	保育内容総論 基本保育シリーズ	児童育成協会監修：仁愛大学編者関連者 中央法規
2017	横山文樹・駒井美知子	保育内容総論 保育を学ぶシリーズ	萌文書林
2017	阿部和子・久富陽子他	新保育内容総論	萌文書林
2018	佐藤哲也	保育内容総論（改訂版）	萌文書林
2018	神永美津子・津金美知子他	保育内容総論 乳幼児教育・保育シリーズ	光生館 中部地区対象
2018	大豆生田啓友・田沢里喜	保育内容総論 保育・幼児教育シリーズ	玉川大出版部 玉川大関連
2018	酒井幸子・守巧	演習保育内容総論	萌文書林

学科目「保育内容総論」の研究

2018	名須川知子・大方美香監修 鈴木祐子他	保育内容総論—乳幼児の生活文化 MINERVA 初めて学ぶ保育—	ミネルヴァ書房
2018	津金美知子・新井美保子	子どもの主体性を育む保育内容総論 新時代の保育叢書	みらい
2018	井上孝之・山崎敦子	子どもと共に学び合う演習保育内容 総論（第2版）	みらい
2018	井上孝之・奥山優佳	演習保育内容総論	みらい
2018	咲間まりこ	コンパス保育内容総論	健帛社
2018	大沢裕・高橋弥生他	新版保育内容総論	一芸社
2018	保育士養成講座編集委	保育内容総論 新保育士養成講座	全社教
2018	近藤幹生他	保育内容総論	青踏社
2018	中村恵・水田聖一	保育内容総論 新保育実践支える	福村出版
2019	江津和也・幸喜健	グループワークで学ぶ保育内容総論	名古屋地域対象 大学図書出版
2019	金沢妙子・前田和代	新訂演習・保育内容総論	建帛社
2019	塩美佐枝・岸井勇雄・無藤隆他	保育内容総論 保育・教育ネオシリーズ	日本女子大、大 妻女大関連者 萌文書林
2019	阿部和子・前原寛・久富陽子・ 梅田優子	改訂保育内容総論—保育の構造と実 践の探求—	桜花学園、岡崎 女子短大中心 萌文書林
2019	豊田和子編著	実践を創造する保育内容総論	みらい
2019	石川昭義・松川恵子著 児童育成協会監修	保育内容総論	中央法規
2019	清水陽子・森真理	保育内容総論：共に育つ保育を探求 する	九州地区対象テ キスト：健帛社
2019	神田伸生・二橋貴志	演習保育内容総論	福村出版
2019	福崎淳子・及川留美	新版：エピソードから楽しく学ぼう 保育内容総論	創世社
2019	太田光洋	保育内容総論	萌文書林

リスト2. 初期刊行文献

1986	久保田浩	保育内容総論	健帛社
1991	日名子太郎	保育内容総論	学芸図書
1992	森重敏	保育内容総論	家政教育社
1974	森重敏	保育内容総論—保育と人間形成—	同文書院
1994	西頭三雄児・久世妙子	保育内容総論—実践を支える保育—	福村出版 愛知教育大
1993	秋山和夫	保育内容総論 教育・保育双書	北大路書房
2000	岸井勇雄	新保育内容総論	保育出版

2000	大場牧夫	保育内容総論改訂版 新保育内容シリーズ	萌文書林
2006	田中良胤・名須川	保育内容総論	ミネルヴァ書房
2010	太田悦生	新保育内容総論（第2版） 新時代の保育叢書	みらい
2011	関口はつ江・岸井優子	実践理解のための保育内容総論 新版保育・教育課程総論	大学図書出版
2011	森上史郎・大豆生田啓友・渡辺秀則	保育内容総論	ミネルヴァ書房
2011	生田・水田聖一	保育実践を支える保育内容総論	福村出版 北陸中心
2014	民秋言・狐塚和恵他	新保育内容総論（新版） 新保育ライブラリー	北大路書房
2014	大豆生田啓友・柴崎正行他	保育内容総論（第2版） 最新保育講座	ミネルヴァ書房
2014	鈴木昌世	子どもの心に寄り添う保育内容総論	福村出版

2. 学科目「保育内容総論」の授業目的の検討

(1) 保育教諭養成研究会の提案内容とその特徴

保育教諭養成課程研究会（無藤隆代表）『幼稚園教諭養成課程をどう構成するか』（前掲）は、今回の幼稚園教員・保育士養成課程の再課程認定に際して、最も早くから取り組んできた研究グループである。そして本資料は平成28年度『幼稚園教諭の養成課程モデルカリキュラムの開発に向けた調査研究報告書』の成果を踏まえた貴重な資料である。本書に示されている「保育内容総論」の考え方と内容は、再課程認定審査基準に大きな影響を持っていると考えられる。

本書では養成教育課程について、「コアカリキュラム」水準と「モデルカリキュラム」水準に区別して説明しているが、ここではコアカリキュラムを踏まえて、応用性を高くしたモデルカリキュラムについて、見ることにする。その具体的な内容は、以下の通りである。

本書では「保育内容総論」について、次のように説明している。

第一、保育内容総論は5領域の保育内容の指導法に加えて、1または2単位（各大学の編成方針による）で開設する。

第二、「この科目では園全体を視野に入れて総合的に指導するという幼稚園教育における指導の考え方や、指導計画の考え方」を学ぶ目的を持っている。その際重要なのは、「子どもの遊びや活動は全体としてみるのが大切」であることを理解させることが要請される。これがサンプルシラバスの中で「幼児教育における遊びを通しての指導」、「幼児教育における環境を通じた実践」で、具体化されている。

第三、5領域はそのような意味においても、つながり合い、絡み合っていることを理解することが必要である。またそれに加えて、年齢的な積み重ねの効果へも留意する必要がある。これは5領域のねらいと内容のつながり、幼児期の終わりまでに育ててほしい10の姿が扱われている。

第四、「教育課程や指導計画の作成においては幼稚園教育の特徴を把握することが大切である」

という記述があるが、この意味は年間計画、期別計画、日案等の指導計画を関連性を持って理解することが必要であるということである。「幼児教育における教育課程・指導計画」、「幼児教育における長期指導計画・短期指導計画」の項目はそれを具体化している。

第五、可能な限り、具体的な事例を通じて幼稚園教育のねらいや内容を展開していく力を身につけることが必要である。そのためには具体的な幼児の姿と関連付けながら、環境を構成し、実践する力を身につける必要がある。そのため具体的な模擬保育案の立案、指導及び、部分保育の指導法の実際、行事の在り方や指導法といった内容が準備される必要がある。

(2) 「幼稚園教諭養成課程と保育士養成課程を併設する際の担当者のシラバス作成について」(前掲)の内容と特徴

2019年5月付でインターネット上で公開されているこの資料は、平成29年4月『保育士養成施設の指定及び運営の基準について』の告示を受けて、上記資料よりも更に、具体的にシラバスの内容に言及している。その主要内容は、次の通りである。

第一、保育内容総論は、保育士養成課程における必修科目である。

第二、保育士養成協議会は保育教諭養成研究会が作成したモデルカリキュラムを参考にしながら、保育士養成課程に即した内容の構成を提案している。そのいくつかを指摘すれば、①保育指針が提示する保育目標、育みたい資質・能力、幼児期の終わりまでに育ってほしい姿と保育の内容との関連を理解すること、②保育指針の各章のつながりを見通し、保育の全体的な構造を理解すること、③子どもの発達、社会的背景、保育内容の歴史の変遷を踏まえて、子どもの実態に即した具体的な保育の過程(計画・実践・記録・省察・評価・改善)を理解すること、④保育の多様な展開について理解することとなっている。尚、この④の具体的な内容としては、長時間保育、特別な配慮を要する子どもの保育、及び多文化共生の保育を意味している。

この内容説明では「保育の基本を踏まえた保育内容の展開」に比重がかかっていることが、特徴的である。

(3) 先行研究の示唆点

学科目「保育内容総論」に関する先行研究について、ここでは、以下の3点について得られる示唆点を整理してみる。

- 1) 門田理世・渡邊由恵・諫山由美子「指導計画作成における保育学生の保育内容5領域の捉えに関する一考察」、『西南学院大学人間科学論集』13-1、2017

本論文は第一に、2017年3月に告示された幼稚園教育要領、保育所保育指針、幼保連携型認定こども園教育・保育要領の実施に際して、2017年の中教審答申(「幼稚園・小学校、中学校、高等学校および特別支援学校の学習指導要領の改善および必要な方策等について」)で示された、以下の内容についての議論が必要であるとしている。

「幼児教育で育みたい資質・能力として、『知識・技能の基礎』、『思考力・判断力・表現力の基礎』、『学びに向かう力、人間性等』の三つを、現行の幼稚園教育要領等の5領域を踏まえて、遊

びを通しての総合的な指導により一体的に育む」(2017中教審答申、前掲)

第二に、旧教育要領の解説でも、5領域の取り扱い方について、特に領域別に教育課程を編成したり、特定の活動と結びつけて指導したりしないよう注意を喚起している。そして今回の改訂で強調されている「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」と、資質・能力と、保育内容との関連性が明らかにされていくようにすることを指摘している。

第三に、保育者養成教育課程における保育内容総論の考え方を、神永美津子等の「相互性を重視した保育内容研究」(常葉学園大学紀要、2011)に依拠して、保育内容総論という学科目は「それぞれに関連しあいながら、総合的に発達の側面を見ていくという、5領域の特性を実感させることにあると指摘している。

第四に、そのことは即「『環境を通じて行う教育』という幼児教育の基本を、子どもの興味関心と保育者が子どもに経験させたい内容や願いに基づいて環境を構成し、子どもがその環境に主体的に関わって遊びや生活を展開させていく営みである」(p. 105)と指摘している。言い換えれば幼児教育はその特徴として、子どもの興味や関心が、遊びや生活の中で総合的に経験されていくということである。しかし、ここでいう「総合的に経験する」とはどういうことなのか、そうした保育活動を成立させるために必要な教師の技術と能力とは何かは、あらためて問われる必要があるだろう。

第五に、そのために保育者にも保育内容を総合的に捉えることが求められる。従って養成課程において、保育内容総論の科目で保育内容を踏まえた保育実践の計画・展開の仕方を総合的に学ぶ必要があると整理している。

本論文では以上の内容を前提として、保育者養成校学生を対象に保育を総合的に学ぶ科目の授業で、保育内容5領域をどの様に捉えたのかについてのアンケート調査を行い、その結果を整理している。

以上をまとめていけば、保育内容総論という学科目の教育目的が5領域を総合的に捉える意義と視点の学習にあること、「遊び活動」をアクティブラーニングを通じて、5領域の視点から総合的に捉えることにおかれている。「総合的に捉えた」という際の判断基準等をどの様に考えるかについては、残された課題もある。

2) 川俣沙織・川俣美佐子・永渕美香子・園入智仁、増田隆・那須信樹 「『保育内容総論』運営上の課題に関する研究」、『中村学園大学研究紀要』第47号、2015

本論文は、学科目保育内容総論の成立過程及び目的と内容に言及した、数少ないものの一つである。そしてこの論考の研究目的は「本学を含む多くの2年生課程の保育士養成施設が抱えている、「保育内容総論」に関わる運営上の課題の解決策を探ること」にあると、明確に示されている。それでは、この論文から何が学べるだろうかについて、整理してみる。

第一は、学科目保育内容総論が、誕生したのが、2010年3月の「保育士養成課程等について(中間まとめ)」(保育士養成課程等検討会)が契機である。その内容は2010年に「厚生労働省告示第278号」によって保育士養成課程改正が行われて、保育内容総論が誕生したことになる。

第二に、その内容は①「保育内容」を「保育内容総論」と「保育内容演習」に区分する。②保

育内容の全体的な構造や総体を理解した上で、養護と教育に関わる領域等について学ぶことが必要であるため、総論と内容演習の教科目を設定するということである (p. 217)。

第三に、中村学園大学ではこの説明に従って、保育内容各領域 (8 科目) を開設し、その学習に先立って保育内容総論を学ぶことが位置づけられた。

第四に、「中間まとめ」の趣旨を生かして、同大学では 1 年前期に開設した。それによって科目のねらいを達成する上で専門用語の習得、領域に関する最低限の知識の不足、学生の学習意欲の低さといった状況があって、円滑な運営が困難となった。

第五に、上記の状況ではあったものの、教員達は「だからこそ保育内容総論を養成課程の始期に開講することで、保育についての学生の関心と意欲を引き出し、専門職への内発的動機付けの契機とする必要がある」(p. 219) との認識を示すと同時に、開講時期や授業内容等、多くの 2 年制課程の保育士養成施設が抱える課題でもであると述べている。

3) 徳本達夫「保育内容総論授業の現状と課題」、広島文教女子大学『人間福祉研究』第13号、2015

本論文は2010年に改正された保育士養成課程によって、2011年度から新設された保育内容総論に関する数少ない研究の一つである。その研究目的は「保育内容総論が総論的な授業として機能し、結果として他の授業と関連させながら、保育専門科目相互を横断的・総合的に捉え、保育科目以外の教養系の授業との関連も意識することによって、あらゆる学びが一人一人の保育学生において総合化される授業の在り方を、授業内容と方法の観点から述べた」(p. 83) ものと記述されている。保育内容総論の内容を深めその教育目的、内容を明確にする必要性から本研究に着手した私にとっては、大変共感できるのである。以下、その研究結果を整理すれば、次の通りである。

第一に、徳本の主張の一つは、「主体的な活動は学びを総合化する」ということである。次いで著者はその内容を、「主体的な学習姿勢を形成する過程で多様な学習内容を学生が自分の内部で総合させ続けることができる。それと共に、総合的なとらえ方によって体得し続ける専門的な知識や技術を保育の実践の中で行おうとする。あるいは、他者の実践を理解する際に総合的な視点から行おうとする。その意味では保育の総体を総合的に相互につなげて考える力をつけることが肝要である」(p. 83) と説明しているが、「総合的」に学ぶことに言及していることは貴重である。

第二に、保育内容総論という科目の新設を、単に科目の新設ということだけではなく、「総論的学習という考え方を保育士教育に関わる授業者が自分の実践を振り返る契機にすることが重要である」(p. 83) と指摘していることである。この指摘は重要だが、保育内容総論のカリキュラム上の位置づけを勘案するとき、問題点が残っている。

第三に、保育者にとって、保育を総合的・相互的に理解することは極めて重要な学習課題である。そのためには保育学生に学びそのものが総合的相互関連的な学びの姿勢を培うよう準備されていないなければならない。それは具体的には、「保育者養成課程の構造化・総合化」を要請している。

第四に、保育内容総論、保育者論の開設によって、従来の丁寧な総論的保育原理ができなくなった。そこでは保育原理と保育内容総論の、一貫的連続的授業展開が求められる。

筆者の意見では「実際の保育実践をもとに原理的な観点とその原理の応用的な取り組みを学ぶこと」と、「保育原理を踏まえつつ保育課程・指導計画とその実際を中心に、保育実践例を検討することに重きを」(p.84) おいてきた。

第五に、保育内容の要素の明確化と、それを踏まえた保育の構造化が必要である、という主張である。歴史的に見ると保育内容は相互関連性を意識することなく羅列的に展開されてきた。しかし、その後大場牧夫、加藤繁美、清水益實、岩附啓子等によって進められた保育の構造化の論議は、とても重要な示唆点を含んでいたと評価する。

第六、まとめとして、徳本は例えばということで2014年度の保育内容総論の教育内容の柱を例示している。それは①保育内容の歴史的展開、②保育内容の構造化、③実際の保育内容の検討、④発達過程の観点からの保育内容の在り方、展開の仕方の検討（異年齢保育実践を中心に）という内容である。

「現代社会の諸問題に目を向けて、これからの社会を生きる子どもたちが大人と共同しつつ自身で解決するための力量とそのため視点のどの様に体験的に実感的に学ぶか」(p.86) が、保育内容総論をより意味ある学科目として発展していく視点であるという徳本の主張は、傾聴すべき内容を含んでいる。

3. 「保育内容総論」の内容体系比較

次に「リスト1. 最新文献」(前掲)より選んだ教科書の内容体系比較を行う。教科書は、3法令改訂に対応しているものの中から以下の6冊を選定した。

- ①石川昭義・松川恵子『保育内容総論』2019 中央法規
- ②阿部和子他『改訂保育内容総論—保育の構造と実践の探究—』2019 萌文書林
- ③豊田和子他『実践を創造する保育内容総論』2019 みらい
- ④近藤幹生『子どもと社会の未来を拓く—保育内容—総論』2018 青踏社
- ⑤津金美智子・新井美保子『子どもの主体性を育む保育内容総論』2018 みらい
- ⑥大豆生田啓友・田澤里喜『保育内容総論』2018 玉川大学出版部

尚、下の表の番号は、上記の教科書の番号と対応させている。

表1. 「教科書に記載されている主な項目」

内 容	扱っている書籍
*社会的背景、保育内容の(歴史的)変遷	①②③④⑤⑥
*「育みたい資質・能力」 「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」	①②③④⑤⑥
*保育の全体構造	①②
*教育課程・全体的な計画 (指導計画、評価)	①②③④⑤
*保育の多様な展開 (長時間保育、特別な配慮を要する子どもの保育、多文化共生)	①②③④⑤⑥

幼小接続	①②③④⑤⑥
家庭や地域との連携	①②③④⑤⑥
子どもを取り巻く環境	③
幼児教育の思想家	④
幼稚園、保育園、認定こども園の保育内容、役割等	②③④⑤
子育て支援	① ③④
養護と教育	① ③④ ⑥
環境を通して行う保育	①② ⑤
遊びを通しての総合的な指導	① ③ ⑤⑥
5領域について（ねらい及び内容、実践等）	① ⑥
年齢別の保育内容、実践	①②③ ⑤
異年齢保育	① ③
園における行事	② ⑥
様々なカリキュラム（森の幼稚園、レジヨエミリア・アプローチ等）	②③ ⑤

(1) 共通して扱われている内容

表1で*印を付けているものは、前述の保育教諭養成課程研究会（無藤隆代表）『幼稚園教諭養成課程をどう構成するか』（以下資料1とする）および『幼稚園教諭養成課程と保育士養成課程を併設する際の担当者のシラバス作成について』（以下資料2とする）の2つの資料に示されている、保育内容総論で扱われることが必要であるとされている内容である。

それぞれの教科書で扱われている項目を種類別に分類した結果、最も多く扱われている項目は、「保育内容の（歴史的）変遷」、「育みたい資質・能力」および「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」、「保育の多様な展開（長時間保育、特別な配慮を要する子どもの保育、多文化共生）」、「幼小接続」、「家庭や地域との連携」であった。そして次に多く扱われていたのは、「教育課程・全体的な計画（指導計画、評価）」、「幼稚園、保育園、認定こども園の保育内容、役割等」、「養護と教育の一体化」、「遊びを通しての総合的指導」、「年齢別の保育内容、実践」であった。

(2) 扱いの少ない内容

次に、扱いが少なかったものを示したい。少数であったものは「5領域について（実践等）」「子どもを取り巻く環境」、「幼児教育の思想家」であり、次に「保育の全体構造」、「異年齢保育」、「園における行事」などであった。半数で扱われていたものが、「子育て支援」、「環境を通して行う保育」、「様々なカリキュラム（森の幼稚園、レジヨエミリア・アプローチ等）」であった。

(3) まとめ

以上より、扱いの多い内容は、資料1および資料2に必要であると示されているもの（項目に*印が付いているもの）であることが明らかとなった。しかし、「保育の全体構造」が少ないのは意外である。資料2によれば「保育指針の各章のつながりを見通し、保育の全体的な構造を理解すること」と、その必要性が明記されている。

川俣ら（前掲）は、1年前期に保育内容総論を開講することで、初めて保育を学ぶ学生には基本用語や知識の不足などがあり、円滑な授業運営ができなかったと指摘しており、筆者も実際に保育内容総論の授業をする際に、同じような体験をした。しかし、保育全体の構造を丁寧に示していくことで、学生たちは、漠然としながらも大まかな見通しをもつことができた。そういった意味で、「保育の全体構造」を授業に取り入れる意義は大きいと考える。

一方で、それぞれの年齢ごとの発達の姿を丁寧に説明したり、領域について一つ一つ丁寧に説明したりしているものもある。発達の姿についていえば、確かにそれぞれの発達段階を踏まえて指導計画を立てる必要はあるのだが、保育内容総論の授業では、それほど詳しく扱わなくてもよいと考える。また、領域を個別に説明していく必要もないように思われる。領域はそれぞれの領域の授業で扱うからである。むしろ無藤が指摘しているように、子どもの遊びや活動は全体としてみるのが大切であること、そして5領域は別のものではなく、つながり合い絡み合っていることを理解させることが重要なのである。

筆者は、「保育内容人間関係」の授業も担当しており、発達や領域の内容などは、保育内容総論と非常に似ており、重なる部分も大きいと感じている。保育内容総論は、「総合的に指導する」という考え方や指導計画の考え方を学べるものでなくてはならない。そのためには、前述した「共通して扱われている内容」に挙げられている項目以外に、劇遊びなどを含む「園における行事」や、プロジェクト活動など「様々なカリキュラム（森の幼稚園、レッジョエミリア・アプローチ等）」を授業で積極的に扱うことも必要なのではないかと考える。劇遊びやプロジェクト活動のすぐれた実践事例をもとに学ぶことは、総合的に指導するための一助となるであろう。

本研究の第二の目的である、「保育内容総論」新設時に、どのような教育的意図と、教科内容であったかについて、徳本（前掲）は「保育内容総論が総論的な授業として機能し、結果として他の授業と関連させながら、保育専門科目相互を横断的・総合的に捉え、保育科目以外の教養系の授業との関連も意識することによって、あらゆる学びが一人一人の保育学生において総合化される授業」と述べており、保育専門科目相互を横断的・総合的に捉えることができるように、今後シラバスを工夫していく必要があるであろう。

4. 発展課題

(1) 保育構造論からの示唆

日名子（1986）は、保育の構造について、保育内容の構造のみを明らかにしただけでは内容と他の部分との相互関連性をみるには不十分であると指摘している。構造を学習することは、どのようにものごとが関連しているかを学習することであると述べ、保育全体と各段階の構造化・体系化が必要であると述べている。そのことから、保育構造論を中心に教育・保育課程、保育方法、保育内容を構造的に把握するということが今後の課題であると考えられる。

(2) 李基淑『幼児教育課程』（良書院、2015）からの示唆

目次を示して、示唆点を整理することである。日本ではこの分野の研究が少なく、韓国の幼児

教育課程、保育課程研究から学ぶことは沢山ある。参考までに同書の主要目次を示せば、次の通りである。中でも韓国では領域の統合的指導、子どもたちの相互作用重視が広く指示されており、興味深い。

李基淑『幼児教育課程』目次

第1章 幼児教育と幼児教育課程（概念規定）／第2章 幼児教育課程構成の基礎（思想・哲学・心理学基礎）／第3章 我が国の幼児教育課程／第4章 幼児教育課程の接近法と類型（世界の幼児教育課程論）／第5章 幼児教育プログラム／第6章 幼児教育課程の構成（教授学習方法を含む）／第7章 幼児教育課程の運営（活動計画と教師の役割）／第8章 統合的幼児教育課程の構成／第9章 幼児教育課程領域（領域性格、活動内容選定等）

- (3) 研究目的三に示したように、保育方法論、教育課程論、保育課程論、保育内容論等の関連学科目の内容体系を比較検討し、保育内容総論がになうべき教育目的と内容を明らかにする必要がある。

引用・参考文献

- 阿部和子・前原寛・久富陽子・梅田優子『改訂保育内容総論—保育の構造と実践の探究—』2019 萌文書林
- 石川昭義・松川恵子『保育内容総論』2019 中央法規
- 大豆生田啓友・田澤里喜『保育内容総論』2018 玉川大学出版部
- 門田理世・渡邊由恵・諫山由美子「指導計画作成における保育学生の保育内容5領域の捉えに関する一考察」、『西南学院大学人間科学論集』13-1、2017
- 川俣沙織・川俣美佐子・永渕美香子・園入智仁・増田隆・那須信樹『『保育内容総論』運営上の課題に関する研究』、『中村学園大学研究紀要』第47号、2015
- 近藤幹生『子どもと社会の未来を拓く—保育内容—総論』2018 青踏社
- 徳本達夫「保育内容総論授業の現状と課題」、広島文教女子大学『人間福祉研究』第13号、2015
- 津金美智子・新井美保子『子どもの主体性を育む保育内容総論』2018 みらい
- 豊田和子他『実践を創造する保育内容総論』2019 みらい
- 中山忠政「保育士養成課程における教科目名称の変更」、『プール学院大学研究所紀要』第52号、2012
- 日名子太郎『保育の過程・構造論』1986 学芸図書
- 無藤隆（代表）保育教諭養成課程研究会『幼稚園教諭養成課程をどう構成するか』2017 萌文書林
- 源証香、小谷宜路「保育内容研究の在り方に関する一考察」、『白梅学園大学紀要』2013
- 「幼稚園教諭養成課程と保育士養成課程を併設する際の担当者のシラバス作成について」保育教諭養成課程研究会 (<http://youseikatei.com/>)；日本保育者養成教育学会 (<http://www.h-hyousei-edu.jp/>)

(受理日 2020年1月8日)